

第5章 学生支援型 I R

1. I Rデータを用いた共通分析

IR 研究部会
代表 関西国際大学 藤木 清

1.1 分析の趣旨

本取組では、新生を対象とする大学入試センター研究開発部が開発した言語運用力と数理分析力テストのモニター調査を各連携校で実施し、これらの能力に関する入学時の測定データとして蓄積してきた。また、連携校間で質問項目を共通化した学修行動調査を毎年実施してきた。

これらのデータを用いた分析として、藤木（2014）は、学生の入学時の能力と1年終了時成績のデータを用いてタイプ分類を行い、タイプ別に学習行動調査の各項目を比較することによって各タイプの学生の特徴を明らかにしようとした。

その後、関西国際大学以外の連携校でも、同様の方法で集計を行った。その結果、いくつかの共通点と相違点が現れた。本稿では、連携校間の比較結果について吟味するとともに汎用性について言及する。

1.2 分析に使用するデータ

本分析での対象者は2015年度生とした。使用するデータとその概要は以下のとおりである。

(1) 「言語運用力」（マークシート方式 40 分）

日本語および英語の文章、短文、会話文や図表を材料として、情報の把握（文章内の情報を正しく読み取る能力）、内容の理解（文章の内容の理解や解釈を行う能力）、推論と推察（推測、評価、判断等を行う能力）を問う。

(2) 「数理分析力」（マークシート方式）40 分）

数と式、関数に関わる計算、定義やルールを理解して適用する能力、グラフや数表の内容の読み取り、数理的な思考力を働かせた問題解決力を問う。

なお、本分析では、学生の入学時の総合的な基礎能力（ポテンシャル）として、言語運用力テストと数理分析力テスト結果の合計点を用いている。両テストはいずれも論理的な思考力が必要なテストである。したがって、両テスト結果の相関はある程度存在する。しかしながら、言語的と非言語的なちがいなど、内容は異なっており、むしろ両テストを用いることで、より広範な領域をカバーできると考えた。

(3) 1年終了時の学業成績（GPA）

パフォーマンスのデータとして1年終了時点における学業成績 GPA を用いる。1年終了時点の GPA を用いた理由は以下のとおりである。どの大学も1年次と4年次の GPA の相関は高い傾向にあるため、何らかの支援を行うにはできるだけ早い時期のデータを用いるべきであると考えられる。しかしながら、1年の前期は初年次科目が多かったり、大学での学び方への適応が不十分な学生が存在するため、1年前期終了時点の GPA データをパフォーマンスデータとして用いるのは得策ではないと考えた。以上の点を考慮し、1年終了時点の GPA を用いた。

(4)2015年度秋～2016年度秋に実施した学修行動調査

連携校では、質問項目を共通化した学修行動調査を1年次末など、各大学の事情に合わせて実施し、学生の学修行動の状況や学修成果などの把握に使用している。調査内容は、大学への適応状況、学習習慣、普段の行動、教室外プログラムの経験、入学後の能力変化などである。この分析では、1年次末～2年次に実施した調査結果を用いた。

1.3 タイプ分類

学生のタイプ分類は、入学時の言語運用力と数理分析力テストの合計点（PTS）と学業成績のデータ（GPA）を用いて次の4タイプに分類した。

タイプ1：PTS 平均値以上かつ GPA 平均値以上

タイプ2：PTS 平均値未満かつ GPA 平均値以上

タイプ3：PTS 平均値未満かつ GPA 平均値未満

タイプ4：PTS 平均値以上かつ GPA 平均値未満

なお、タイプ1は基礎的な能力が高く、パフォーマンスとして GPA が高いタイプであり、比較的自律的に学ぶことが可能な学生であることが想定できる。タイプ2は基礎的な能力は比較的低いものの、パフォーマンスが高いことからモチベーションが高く努力タイプであることが想定される。タイプ3は基礎的な能力もパフォーマンスも比較的低いことから、学習意欲が低く、学習習慣も身につけていない学生が含まれていることが想定される。タイプ4は基礎的な能力が高いもののパフォーマンスが比較的低くモチベーションに問題がある学生が含まれていることがうかがえる。

1.4 比較

前節の4タイプごとに学修行動調査の各項目を集計し、比較検討を行った。

性別に関する主な傾向は、どの大学もタイプ 3、4 に比べて、タイプ 1、2、すなわち、成績が高いグループは女子の比率が高い。また、タイプ 4 に比べて、タイプ 3、つまり、ポテンシャルとパフォーマンスともに低いグループは男子の比率が高かった。

普段の意識や行動については、大学によって多少違いはあるが、多くの項目でタイプ間の差はあまり見られないものの、「学内外の行事やボランティアなど、様々な活動に参加する方だ」「課題の完成に十分な時間と労力をかける方だ」「学期末などの試験準備に十分な時間と労力をかける方だ」の 3 項目については、タイプ間の差が開いており、特にタイプ 4 が低い傾向が見られた。また、2 つの大学ではタイプ 3 もタイプ 4 と同様に低かった。学習へのモチベーションの低さが、これらの行動に表れているといえよう。

授業時間以外に授業課題や準備学習、復習をする時間が 3 時間以上の学生は、タイプ 1 は 4 割以上、タイプ 3 は 2 割前後である。また、学習に関する経験では、タイプ 3、4 の学生(特に 4 の学生)は正当な理由なく授業を欠席する傾向が比較的高く、(特に 3 の学生は)授業時間以外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりする経験が少ない傾向がある。すなわち、学習へのモチベーションの低さが、授業への欠席の多さ、授業時間外学修時間の少なさ、他の学生との授業に関する会話の少なさに影響を与えているのではないかと考えられる。

以上の結果が学習への適応にも表れた。「うまくいっているか」という質問に対しては、どの大学も「対人関係」が最も高く、次いで「生活全般」、「学習面」の順になっている。したがって、4 大学とも「学習面」は「対人関係」に比べるとうまくいっていないと感じている学生が多いことがうかがえる。また、「学習面」に関してはタイプ間の差が大きく、成績評価と連動し、タイプ 3、4 はうまくいっているとは思っていない学生が比較的多い。

入学後の能力変化については、項目によって違いがあるものの、各大学ともタイプ 1 は多くの項目で平均値(増えた=4、どちらかといえば増えた=3、どちらかといえば減った=2、減った=1の平均)が高く、タイプ 2 が概ねそれに続く。タイプ 3、4 については、大学によってはタイプ 3 の平均値が低い項目が多かったり、逆にタイプ 4 の方が低い項目が多い大学もあった。さらに、タイプ 2 の平均値が低い項目が少なからずある大学もあり、能力変化に関する自己評価はタイプ 1 の平均値が高いことを除けば、大学間で差異があることがわかった。

1.5 タイプ間比較に関する考察

上記の結果を整理すると、以下のとおりである。

タイプ 1 の学生は、もともとポテンシャルも高く、学習習慣が身につけているので、授業の欠席は少なく、授業時間外でも授業に関する学習を行い、他の学生と授業に関する話をすることも比較的多い。また、課題や試験準備に時間をかけることができ、その結果として、GPA、入学後の能力変化、学習面での適応がうまくいっている状況が見られる。

タイプ2の学生は、ポテンシャルの低さを学習意欲でカバーしており、GPAの低いタイプ3に比べると学習時間が長く他の学生と授業に関する話をする学生も比較的多い。課題や試験の準備も時間をかけており、その結果、GPA、入学後の能力変化、学習面での適応がうまくいっている学生が比較的多い。しかしながら、学習面での適応や入学後の能力変化について自己評価が低い大学もあることから、タイプ2の学生には自己効力感を高める施策が必要であることがうかがえる。

タイプ3の学生は、ポテンシャルと成績がともに低い学生であり、学習習慣も学習意欲も比較的低く、授業時間外の学習時間も短い。その結果、授業での理解が進まずGPAの低さ、学習面での適応の低さにつながっていると思われる。ただし、このタイプが入学後の能力変化について、大学間で共通してとりわけ低い項目は特定できない。

タイプ4の学生は、ポテンシャルが比較的高いにもかかわらず、GPAが低い学生である。授業時間外の学修時間はタイプ2の学生とあまり大きな差異はないが、他の学生と授業について話をするのが比較的少なく、課題や試験の準備にはあまり時間をかけない傾向が見られることから、学習意欲が低いことがうかがえる。学習面での適応や入学後の能力変化も自己評価は低い傾向が見られる。特に「外国語を用いたコミュニケーション」についてはいずれの大学のタイプ4学生も低いことから、苦手なことに挑戦する意欲が弱い様子が見られる。

1.6 今後の課題

今回、同じ方法で各大学のタイプ分析結果を比較したことにより、共通点と相違点が発見できた。このことは学内の分析だけで施策を考えるより複数大学で連携して分析することによって、より精度の高い学生支援策や教育改善策につなげられうることを確認できたことは大きな収穫であった。その成果を踏まえ、今後の課題として以下の点があげられる。

1つ目は、今回の分析結果にもとづく学生支援策の検討である。ここでは、入学時の能力（テスト結果）と1年間大学で学んだあとの成績や学修行動調査結果を用いて分析し、まだ仮説段階ながら各タイプの特徴について整理した。今後は、これらの仮説をさらに検証しながらも各タイプの学生に対する具体的な支援策を検討していく必要がある。

2つ目は、タイプ分類の切り口の検討である。今回のタイプ分類では学習意欲や学習習慣のパフォーマンス（成績）の影響に焦点をあてることができた。今後は、これ以外の切り口（タイプ分類の仕方）についても検討を重ねていく必要がある。

3つ目はデータシェアリングの検討である。これまでのIR分析で多いのは、学内の学部間比較や学科間比較である。学科の専門性やそこに集う学生の気質によって、ある程度比較は可能である。しかしながら、そこから何らかの学生支援策や教育改善策を考えることは可能であるが、学科特性に関する策に限定されるきらいがある。それに加え、今回の分析のように似ているタイプについて大学間で比較することで、表れている特徴が一般的なのかどうかを確認することができ、学生支援策や教育改善策の妥当性をみることができる。

と考えられる。このような比較をするためには個人情報 を考慮したうえで、データをシェアすることで分析する視点が広がり、より有為な学生支援策や教育改善策を検討することが可能となるであろう。

以上の点については、連携事業の補助金が終了した後も引き続き検討していきたい。

I R 研究部会メンバー

藤木清（関西国際）、芹澤高斉（淑徳）、黒沢伸夫（淑徳）、中西規之（淑徳）、
富岡和久（北陸学院）、田崎慎治（くらしき作陽）

参考文献

- 1) 藤木清, 2016, 「言語運用力テストの活用」独立行政法人大学入試センター研究開発部
『平成 24-27 年度特別研究「新しい試験の開発に関する調査研究」報告書 大学での学
修に必要な基本的能力の測定 最終報告書』 pp.323-329

2. IRシステムの開発と活用

関西国際大学 学長補佐 / 評価センター長 / グローバル教育推進機構

藤木 清

関西国際大学 教務部長

得永 義則

2.1 背景と開発コンセプト

現在、多くの大学の IR 部門では、IR システムとして、(1)Excel、(2)BI エンジン、(3)統計ソフトなどが使われているが、特に(2)や(3)は、かなり高額なソフトを購入する必要がある。

また(2)BI エンジンは、適応調査(アンケート調査)データの取り扱いを苦手としている。

IR を行うためには、分析に必要な多種多様なデータを蓄積する「データプール機能」、そのプールされたデータを分析のために結合・抽出・編集するための「データ生成・編集機能」、そして、データ分析を行いビジュアルに可視化する「データ分析機能」が必要である。

今般、これらの機能を合わせ持った独自の「IR システム」を、ビッグデータを高速に処理することが出来る「ユニケーj開発手法」を用いて開発を行った。このユニケーjを採用することで、安価で高速な IR システムの構築が可能となり、この先、まだ IR システムを導入できない大学等への展開を期待することができる。

2.2 機能の概要

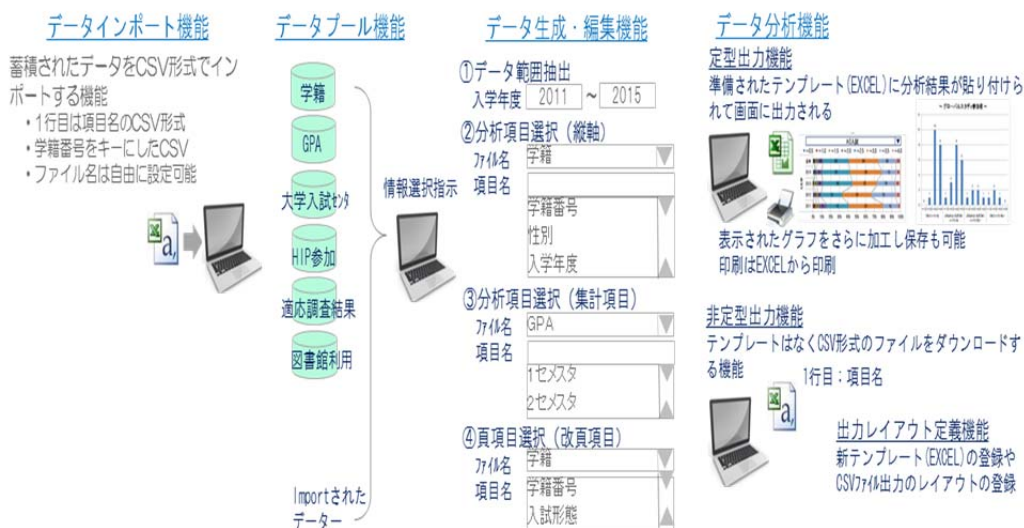
この IR システムは、CSV 形式でデータを取り込むためのインターフェイスならびにこれらのデータ類を蓄積するフォルダーを管理する「データプール機能」、そして、蓄積されたデータを編集し分析に使用するデータを生成する「データ生成・編集機能」、分析と視覚化を行う「データ分析機能」で構成されている。

データプール機能	各部署からのデータを集約し保管する。
データ生成・編集機能	当該分析に必要なデータ群を生成し編集する。
データ分析機能	当該データの分析ならびにグラフ化を行う。

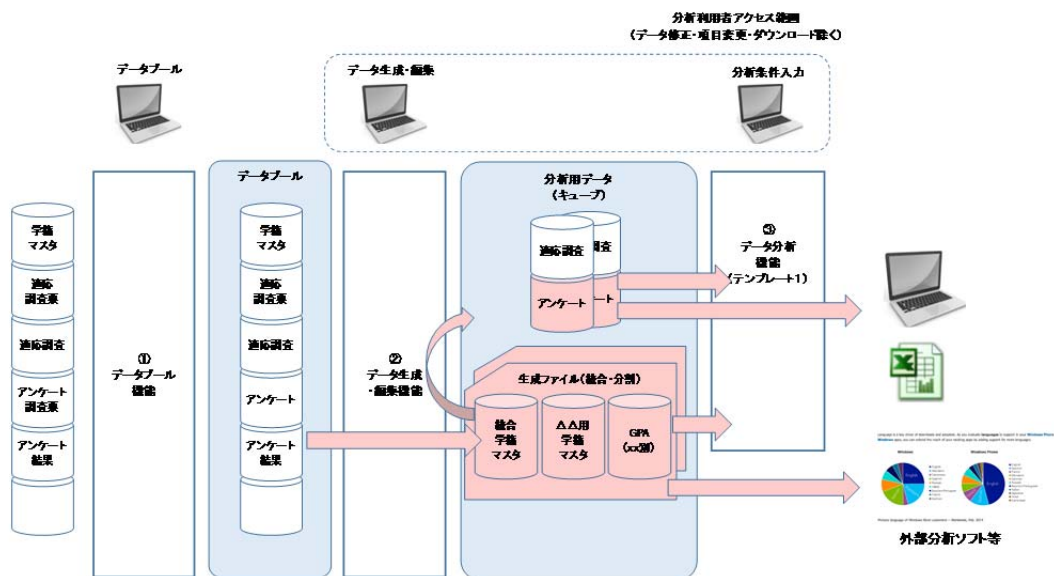
図表 5-2-1 機能の概要

これらの機能概要、概念については、以下の「図表 5-2-2 IR システムの機能概要」

と「図表 5-2-3 IRシステムの概念図」を参照されたい。



図表 5-2-2 IRシステムの機能概要



図表 5-2-3 IRシステムの概念図

2.3 機能一覧

今回開発する IR システムの機能毎の詳細概要は、次のとおりである。

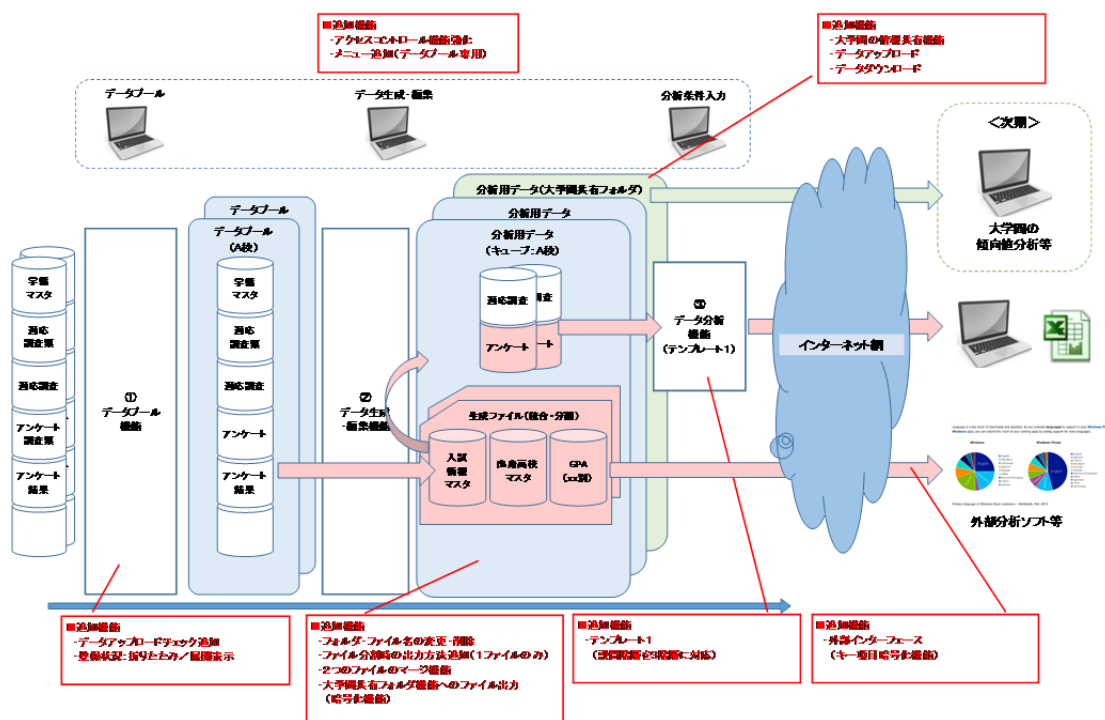
図表 5 - 2 - 4 機能一覧

機能名	機能概要
■メニュー	
ログイン	システムを利用できるユーザかどうか認証を行う
分析利用者用メニュー	「データ生成・編集」「データ分析」機能を利用するユーザ向けメニュー
データ管理者用メニュー	システム管理者機能除くフル機能(「データプール」「データ生成・編集」「データ分析」「大学間共有」)を利用するユーザ向けメニュー
データプール専用管理者用メニュー	「データプール」機能のみを利用するユーザ向けメニュー
システム管理者用メニュー	ログイン管理を行うユーザ向けメニュー
■データプール機能	
データ プール初期登録	IRシステム内で利用するデータの定義情報を登録する
データプール アップロード	IRシステム内で利用するデータの取り込み処理を行う
データプール ダウンロード	IRシステム内に取り込みを行ったデータをCSV形式で出力する
データプール メンテナンス	IRシステム内に取り込んだデータに対し、修正・削除・追加を行う
■データ生成・編集機能	
【調査】	
調査データ グループ機能と生成	適応調査やアンケートの「設問データ」と「回答データ」をグループ登録し、分析に利用できるようにする
調査データ メンテナンス	“調査データ グループ機能と生成”で登録されたデータに対し、修正・削除・追加を行う
【分析データ】	
生成ファイル 項目入替／統合／追加	<ul style="list-style-type: none"> ・IRシステム内のデータから、利用したい項目のみを選択した新たなデータの作成を行う(項目順序の入替可能) ・主キーの定義が同じデータであれば、3つまでのデータをinputに指定して新たなデータの作成を行うことができる ・特定の値を指定した新規項目の追加を行う(全データに指定した同じ内容がセットされる) ・新たなデータ作成時、指定項目について暗号化を行うことができる ・新たなデータ作成時、出力先として“大学間共有フォルダ”を指定することができる
生成ファイル マージ	<ul style="list-style-type: none"> ・IRシステム内の複数のデータを元に、新たな1つのデータを作成する(inputデータは3つまで指定可能。キー定義・レイアウトは同一で、キー内容は重複しないこと) ・新たなデータ作成時、利用したい項目のみを選択可能(項目順序の入替も可能) ・新たなデータ作成時、指定項目について暗号化を行うことができる ・新たなデータ作成時、出力先として“大学間共有フォルダ”を指定することができる
生成ファイル分割	<ul style="list-style-type: none"> ・IRシステム内の1つのデータを、条件指定することにより2つのデータに分割する ・出力先の指定により、条件にあったデータ、または、合わないデータのみを出力を行うことができる ・出力先として“大学間共有フォルダ”を指定することができる
生成ファイル ダウンロード	<ul style="list-style-type: none"> ・「データプール」にあるデータをCSV形式で出力する ・指定項目について暗号化を行うことができる
生成ファイル メンテナンス	「データプール」のデータに対し、修正・削除・追加を行う
生成フォルダ・ファイル 名称メンテナンス	IRシステムで作成したフォルダ・ファイルの名称変更、および、削除を行う
ファイルレイアウト照会	“生成ファイル 項目入替／統合／追加”画面利用時、登録された外部インターフェース用ファイルレイアウトを検索、表示する
■データ分析機能	
分析	クロス集計項目の選択画面で指定された情報を元に集計処理を行い、分析テンプレートに結果を出力する
■大学間共有機能	
外部インターフェース用ファイルレイアウト登録	“ファイルレイアウト照会”に表示する、外部インターフェース用ファイルレイアウトの登録を行う
大学間共有用ファイル アップロード	大学間共有フォルダにファイルをアップロードする
大学間共有用ファイル ダウンロード	大学間共有フォルダのファイルをダウンロードする
■システム管理者用メニュー	
ログイン管理	<ul style="list-style-type: none"> ・システムの利用者登録を行う ・システムの利用範囲が変わったユーザに対し、変更・削除を行うことができる

2.4 今後の展開

補助期間の最終年度をかけて、連携校各大学から要望のあった分析用データ(キューブデータ)の編集機能強化や、Excel の視覚化のみでは限界があるためデータ視覚化ツール(Tableau など)への外部インターフェイス構築、そして、大学間共同利用を睨んだ大学間共同利用フォルダーとのインターフェイス構築やセキュリティを強固なものとするためのアクセスコントロール機能の強化を行った(図表5-2-5 IRシステム(大学間共同利用)の概念図)。

当連携事業終了後、「一般社団法人学修評価・教育開発協議会」において、クラウドコンピューティング環境を使って、各大学が独自の分析を行ったり、大学間で共通データを使った分析を可能とするため、各大学別のフォルダー管理や強固なセキュリティの担保に加え、学生情報のマスキングや暗号化などの仕組みを実装したことで、各大学においてIRの真の目的である教育の質保証に向けて活用が進むものと思われる。



図表5-2-5 IRシステム(大学間共同利用)の概念図

第6章 今後の取組～一般社団法人学修評価・教育開発協議会への展開～

関西国際大学 学長補佐 / 評価センター長 / グローバル教育推進機構
藤木 清

1. 一般社団法人学修評価・教育開発協議会設立の趣旨

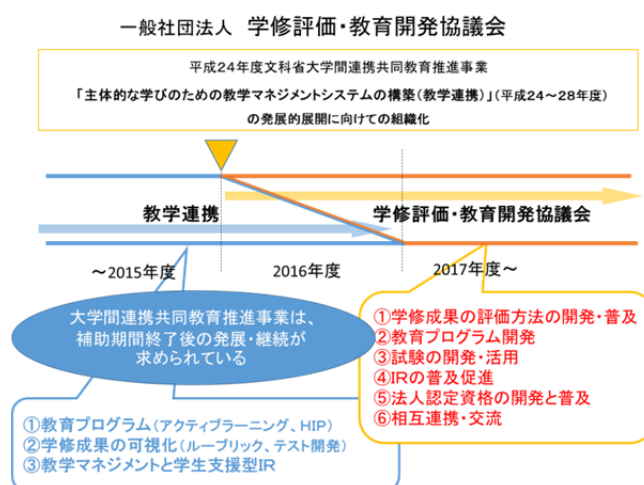
平成28年度に補助期間が終了するのに先立ち、本事業を継承し、汎用化を行うためにIRを基盤とした一般社団法人学修評価・教育開発協議会（以下「本協議会」という）を2016年5月に設立した。本協議会は、18歳人口が減少し、学生の多様化が進む中、それぞれの地域において、特色ある中小規模の必要とされる大学として、各大学が掲げる人材養成目的を実現する“教育力の高い”大学連合づくりを目指す。

ゆくゆくは10大学程度の大学グループとのデータ比較することによって、各大学の強みや課題を把握し、多様化する学生の特性に応じた支援や教育の在り方検討していく。

事業形態としては、参加大学等が学校法人単位で団体会員となる「一般社団法人」とした。これは事業主体としての法人格を取得することにより公益性を明確にし、独自事業の実施に加え、①地方公共団体や各種法人からの委託事業の受託、②文部科学省からの委託事業の受託、③私立大学間では難しい個人情報共同蓄積・分析・利用等を行い易くする、④資格制度等個別大学では実現しにくい独自事業の実施がしやすい、といった利点を考慮したためである。

2. 事業内容

本協議会では、連携取組の活動を継承し、取組を継続するとともに、さらなる事業展開を模索していく（図表6-1参照）。



図表6-1 連携取組と一般社団法人学修評価・教育開発協議会事業との関係

2.1 教育評価事業～学修成果のアセスメント方法の共同開発・共同利用～

近年、文部科学省の改革総合支援事業や次期認証評価事業など、高等教育における学修成果の可視化は、大学としての信用の確保や資源配分の必要条件とされ、自学の教育力の強さを学外に説明することは不可欠である。本協議会では、継続的に学修成果のアセスメントを実施し、可視化していくとともに、多様な学生タイプに応じた対策づくりにその情報を活用することをめざす。具体的には、次の4つの取り組みを行う。

(1) 大学入学者選抜における評価方法の開発

大学入学者選抜における「思考力等」や「主体性等」の評価の推進に向け、より適切に評価する新たな評価手法の調査研究（人文社会分野、理数分野、情報分野の評価手法、面接や書類審査等教科・科目によらない評価手法）について、本協議会の会員大学が協働して取り組むことにより、中小規模大学にとってのこれからの高大接続を率先していく。

(2) 共通の学修行動調査および教員調査の実施

現在、連携事業では、連携校共通の調査として、学生を対象とした学修行動調査と教員を対象とした授業調査を実施している。

学修行動調査は学修時間、HIPの経験、学習習慣および学習技術、入学後の能力変化などの調査項目からなる。授業調査は、アクティブラーニングやルーブリックの利用に関する調査項目からなる。これらのデータは各大学の学修成果を間接的に測定するもので、調査参加全大学のデータと自大学のデータを比較することにより、自大学の優れている点、改善を要する点を確認することが可能となる。また、自大学内で、学生の属性、タイプ別のサブグループ後との比較ができるので、多様な学生に対し、それぞれどのようなプログラムや支援が効果的であったのかを分析し、学生支援の施策の策定に情報を利用していく。

いずれもパネル調査として継続して実施し、各大学における学生の学習に関する現状把握や教育改革施策の効果検証に活用する。

(3) ルーブリックおよびテストの共有

これまでに、関西国際大学で開発していたライティング、プレゼンテーション、リサーチのルーブリックに加え、連携取組では、チームワーク、多様性理解などのルーブリックを開発し、連携校で利用している。ルーブリックは大きく2種類に分けることができる。

一つは、淑徳大学の学士カールーブリックや関西国際大学のKUIS学修ベンチマークのように、大学や学部・学科の教育到達目標をルーブリック化して、在学期間を通じその達成度を追跡していくといった長期的・包括的な評価への活用である。

二つ目は、個別の教育プログラム（教室外体験プログラムや教室内での授業科目）の評価にルーブリックを活用する方法である。たとえば、インターンシップやサービスマーケティングといった学外での経験学習科目において、学修目標を明確にし、個々の学生がその学

習活動を通じての達成度（何ができるようになったのか）や、プログラム自体がうまくいっていたかを評価する場合の活用方法である。

本協議会では、引き続き、ルーブリックの普及を促進していく。

一方、直接的に学修成果を測定する他の方法としてはテストがある。ここでは、専門分野を問わず、大卒者に汎用的に求められるコンピテンシー（OECD）やジェネリック・スキルといわれる汎用性の高い能力・スキルに注目する。ある一定時点（たとえば入学時と卒業時）における論理的思考力、分析力などを測定するときに有用である。本協議会では、合意ができれば、教育・保育や看護などの専門職領域等で知識量を問うテスト開発も行っていく。また、会員校が協働してこのような評価ツールを開発し、自由に利用することを目指す。

（４）IR システムの共同利用と IRer 養成

さらに、学修行動調査、テスト、学業成績 GPA を連結して、学修行動調査の各項目についてクロス集計するシステムを開発した。今後、このシステムをより汎用性の高いものにするのと同時に、クラウド化を行って暗号化した会員各大学のデータを集積できるようにする。

その結果、ある特定の学生集団（たとえば、ある教育プログラムに参加した学生など）と会員大学の集計値とのベンチマーキングを行えば、教育プログラムの効果検証に活用できる。

また、必要に応じて IR 業務に携わる教職員を対象とした研修会を実施し、IRer としてのスキルアップをはかる。

2.2 教育プログラム開発事業～学修成果のアセスメント方法の共同開発・共同利用～

中小規模の私学においては、大規模校と同様に多種多様な教育プログラムを開発・運営していくことは難しいといえる。本協議会では、こうした難点を、複数大学が協力して相互提供することに補完しあい、自大学の強みを自覚しさらに強化していくのである。各大学が実施している教育プログラムの中でも、特に教育効果の高いプログラムについては、オンデマンドシステムによるビデオ教材の共有、教授資料の相互利用を行う。海外プログラムや近隣地域以外でのサービスラーニングなどに、他の会員校の学生が参加できるようにする。以下では例を 3 つ挙げて説明する。

（１）初年次教育プログラムの利用

会員校が実施している教育効果の高い教育プログラムの相互利用を検討していく。特に、初年次教育は共通教養科目、専門基礎科目を問わず、大学の学びのための基盤となる教育プログラムである。

本協議会では、初年次教育プログラムのビデオ教材、教授資料が相互利用できるようにし、必要に応じて教授上のポイントなどについてワークショップを行うことも想定している。

(2) 履修証明制度を活用した社会人向け教育講座の共同開発

少子化が進む中、社会人を対象とした教育プログラムの整備が急務となっており、本協議会では、「履修証明制度」を活用した社会人向け教育講座を共同で開発していく。また、「職業実践力育成プログラム」(BP)の認定を目指したプログラム開発を行い、各大学がそれぞれの地域でこれらのプログラムを開講し、地域の人材養成に資するとともに、社会人学生の受け入れ促進に取り組む。

(3) 会員校相互間による、教室外体験学習プログラムの相互乗り入れ

各加盟校で実施している教室外での教育プログラムに他の加盟校の学生が参加できるようにする予定である。海外学修プログラムや集中型のサービスマーケティング、インターンシップなどがその例である。他大学の学生との協働活動により、学生にとってより学修効果の高い取り組みにすることが期待できる。

たとえば、関西国際大学では東南アジア等の海外提携大学と英語を公用語とする海外プログラム(ACPプログラム)を実施している。英語力等の必要条件を満たし、遠隔学習などを通じて事前学習に参加できる他大学の学生を受け入れ、単位付与も含めた受け入れを行っていく。また、(2)に掲げた社会人および一般学生に対し、一般社団法人として民間資格を共同で創出することも検討していく。

3. まとめ

以上、本協議会の事業の例を挙げた。今後、本協議会に複数の委員会を置き、これらの事業を具体的に展開していく。また、事業を確実に展開するためには、現在の会員数を拡大する必要がある。そこで、今後、本取組の成果の発信をさらに行い、会員大学を増やして、この教育改革の取組を、全国に広げていく所存である。